

蝶の博物詩

生態15

擬態1



コノハチョウ
(2010年10月31日 石垣島)

photo by

Nishiyama



コノハチョウ
(2010年10月31日 石垣島)

蝶の博物詩

生態15

擬態1

前号までに蝶の天敵としてクモとカマキリの例をあげたが、実際にもっとも多い強敵は鳥類といわれている。しかし私は鳥が蝶を捕えた現場をみたことがない。後翅が対称的にギザギザに欠けた蝶をみて、たぶん鳥に襲われたのであろうと想像するにとどまる。

蝶の飛び方は不規則である。昆虫採集をした人ならば誰でもよく知っているが、捕虫網で一度捕り損なうと二度と網に入れることはむずかしい。スピードや方向を変え、急に高く飛び上がったり。急降下して草叢に飛び込んだり、実に巧妙に逃げる。誰にでも捕まるために“馬鹿蝶”のあだ名があるオオゴマダラですら蝶屋の手から逃げて大笑いしたことがある。

このような逃避行動は緊急措置であり、視力がよく動態視力も優れた鳥類から身を守る大切な方法は動かないことと、周囲の自然物に似せて姿を晦ますことである。これを隠蔽擬態という。

動かない隠蔽擬態の代表的な昆虫はナナフシであろう。私が子どもの頃、ナナフシをみたことがない。あるいはみても認識しなかったのかもしれない。初めてみたのは10年ほど前、石垣島の山のなかを家内と歩いているときであった。変わった虫、珍しい虫を発見する天賦の才のある彼女は、他方、遠近、左右の方向音痴で、“そこそこ、その枝の先のほう”と、ナナフシの位置を正確に伝えてくれない。やっとみつけたナナフシは風とともに揺れるが、長い脚を自発的に動かさない。翅もない不思議な形状はこれでも昆虫かと疑いたくなる。

蝶の隠蔽擬態の例としてコノハチョウが有名である。翅の裏面はクヌギなど広葉樹の枯葉にそっくりで、細かい葉脈模様まで見事に備えている。ところがである。翅の表面には緑と橙色の美しい模様があり、むしろ警戒色を示している。羽化直後や午前中に樹液を吸っているときなど、翅を開閉して警戒色があらわとなる。高い木の梢の先でテリトリーを張っているときには翅が半開きとなって、下から見ると美しい橙緑色が透見される。午後になるとコノハチョウは低い木の枝にとまって翅を閉じ、動かなくなる。動かないことが天敵から身を守る最大のポイントであり、コノハチョウの枯葉状の隠蔽効果も、休止しているときに限って有効と思われる。

コノハチョウと同様に、翅の裏面が枯葉に似た蝶として、近縁のイワサキコノハや親戚のタテハモドキ、アオタテハモドキ、イワサキタテハモドキがあげられる。いずれも南方系の蝶、ないし南国からの迷蝶である。面白いのはタテハモドキ(本誌18巻11号)で、秋型は翅外縁に凹凸があり枯葉様にみえるが、夏型は目玉模様がついていて、まるで別種のようなのである。

西山茂夫